

## 『古来風躰抄』における万葉抄出歌の本文異同について

—「たるみ」と「たるひ」を中心—

趙力偉

一

『古来風躰抄』は周知のように、大まかに初撰本と再撰本の二系統の伝本が存在する<sup>1)</sup>。再撰本の跋文に、「(初撰本の内容を)今更に直すべきにあらで、また同じ事を記しつけ侍る」とあるように、初撰本と再撰本との間に基本的には大きな異同が見られないが、初撰本と比べて、再撰本には勅撰抄出歌の歌数が若干減らされるなど精撰の動きが見られ、初撰本を簡略化する傾向が認められよう。また上巻の万葉抄出歌に関しては、初撰・再撰本はともに一九一首で抄出歌の内容と歌数に変わりがないが、ただ万葉歌の表記においては多数の異同が存する。漢字本文と訓読を併記する形で抄出された歌は初撰本に多く見られるが、再撰本ではだいたい減らされている。その代わりに、訓読を傍記する歌や訓読のみの歌は増えたので、こ

でも一応再撰本の簡略化の傾向が確認できる。

しかし、興味深いことに、上巻の万葉抄出歌に表記レベルの異同を超えた本文異同が、極めて希ながら存在する。その一例として、『万葉集』巻八の巻頭を飾った志貴皇子の歌(二四一八)<sup>2)</sup>をあげることができる。俊成自筆本(初撰本)に

いはそ、く垂見<sup>ツルミ</sup>のうへのさわらひのもえいつる春になりける  
かも<sup>3)</sup>

とある本文が、再撰本では

岩そ、くたるひのうへのさわらひのもえ出る春になりけるかな<sup>1)</sup>  
となつてゐる。この本文異同は書写者による改竄と見るべきか、或いは作者による変更と見るべきか。もし変更と見る場合、変更する理由はいったい何であろうか。本稿はこの本文異同を一つの手掛かりとして、上記の疑問を解きつつ、俊成の『万葉集』撰取や古典受

容のあり方などの問題を探ってみたいと思う。

## 二

『万葉集』の一四一八番歌に関しては、現存する『万葉集』のすべての伝本は一致して「垂見」に作るし、次点本も新点本もそろって「たるみ」と訓んでいるが、仙覚『万葉集注釈』に「此歌ヲ、イハソ、クタルヒノウヘノトカケル事アリ。タルミトイヘルハ、タルミツ也。イハソ、クト云テハ、モトモタルヒトイフヘシ。サレハ此集ニハ、垂見之上乃トカケリ。タルヒト云ヘカラサルヲヤ」と見えするように、「たるひ」という訓みも確かに存在していたようである。これについては、武井和人氏は、俊成が初撰本で「たるみ」とし、再撰本で「たるひ」に変更した、と推論している。ただし、作者自筆本というもつとも信頼できる伝本をもつ初撰本に対し、再撰本は信頼すべき古写本がなく、現存する諸本は必ずしも再撰本の原態をとどめているとは決めがたい。そのうえ、『和漢朗詠集』に撰入され、古くから「たるみ」と「たるひ」の両様の本文で享受されてきたこの万葉歌は、人口に膾炙した名歌であるだけに、後世の書写者による賢しらかな改竄の可能性も大きいであろう。したがって、この本文変更ははたして俊成の手によるものかどうか、結論を急がずに、ひとまず俊成の詠作例に倣しながらじつくり検証してみたいと思う。

『古来風舂抄』再撰本の執筆時期より少し前に、『新古今集』成立の母胎となる後鳥羽院歌壇の発足にあたる百首歌、すなわち『正治二年初度百首』（以下『正治初度百首』と略す）が催された。本百首に出詠した俊成は上記の万葉歌を本歌取りして、

さわらびはいまはおりにも成ぬらんたるひの氷いはそそくなり

(一一〇九)

という一首を詠んでいる。この歌については、『正治初度百首』の主な伝本の間には本文の異同が全く見られない。諸本はすべて「たるひ」となっているので、「たるひ」という本文を基本的に信じてよいと稿者は考える。

一方、『古来風舂抄』を再撰してから三年ほどたった元久元年（二二〇四）、俊成は『祇園百首』においてももう一度この万葉歌の本歌取りを試みた。

岩そそくたるひのうへに生ふるよりもはるなるさわらびの  
ころ

(九・早蕨)

『祇園百首』は島原松平文庫藏本と谷山茂藏本の二本が知られているが、当該歌に関しては異同が見られない。つまり、俊成はこの万葉歌を二回本歌取りしたが、ともに「たるひ」という本文で受容していると見てよいであろう。これらの実作例と合わせて考えれば、二回の本歌取りの間に再撰された『古来風舂抄』再撰本の本文はやはり「たるひ」でよいのではなからうか。したがって、初撰

本の「垂見」から再撰本の「たるひ」への本文変更を俊成自身の手によるものかとする武井氏の推論は妥当であると認めてよいであろう。

しかし、俊成はなぜこのような変更をしたのか。変更の背後にはどういう意図が隠されているのか。このような疑問を持って、まず中古中世の歌学書における「たるみ」・「たるひ」の解釈にめぐる諸説を整理検討してみた。

### 三

中古中世の歌学書においては、「たるみ」・「たるひ」の解釈はその本文の問題と絡み合って、大まかに氷柱説と地名説に二分されている。その代表的なものとして、それぞれ『和歌童蒙抄』と『袖中抄』を挙げることができる。

『和歌童蒙抄』は「たるひ」の本文を取り、「いはの上」にそそく水の岩よりたる、こほりたるあたりに、早蕨萌え出とよめるか」と解釈した上で、

又垂見と書たる本あり。たるみと云野のあると云べし。されど

同第十二云

石走 垂水 早敷八師 君爾恋良久 吾意柄(三〇二五)  
とよめり。是にて心得るに、石よりたる水のほとりと見えたり。

(巻七「蕨」)

と、『万葉集』巻十二にある三〇二五番歌を類歌として引用し、これを根拠に一四一八番歌における「たるみ」の本文および地名説を否定した。この三〇二五番歌については、現存するほとんどの『万葉集』伝本に「垂水之水能」とあり、「たるみのみづの」と訓んでいるが、ただ『類聚古集』だけ「垂氷之」に作り、「たるひのみづの」と訓んでいる。

しかし、同じく範兼の手による『五代集歌枕』の下巻卅九「水」に「たるみのみづ棋津国」という項目が見え、例歌として『万葉集』巻七にある一一四二番歌

いのちかくひさしきよしもいはそそくたるみのみづをむすびて  
のみつ (一一四二)

を挙げている。つまり、範兼は「たるみ」は歌枕で、「たるひ」は氷柱であると、両者を分けて考えているようである。一一四二番歌の「たるみ」を地名とする説は当該歌が「棋津作」と題する一連の作品群に位置するところから生じてきたものであろうが、現在はむしろ『万葉集』編者が滝を意味する普通名詞である「たるみ」を地名と誤解して、この歌を「棋津作」に分類したと考えるのが普通である。また、一一四二番歌の本文については、『元暦校本』には「垂氷水乎」とあり、「たるひのみづを」と訓んでいる。

一方、「垂水」説を主張する代表人物は六条家の人々である。顕昭の『袖中抄』巻三には、一四一八番歌を「たるみ」の本文で挙げ

た後に、

顕昭云、たるみのうへのさわらびとは、摂津國と播磨とのさかひにたるみと云所有。垂水と書り。きしよりえもいはぬ水出る故にたる水と云也。垂水の明神と申神おはす。<sup>15)</sup>

と「たるみ」地名説を力説し、その例証として「摂津作」と注した一四二番歌を引用した。つまり、顕昭はこの一四二番歌こそ志貴皇子歌の類歌であると認識しているようである。そのうえ、顕昭は、

此さわらびの歌を垂見とも云。又垂水とも書たるを、垂氷と書なして、たるひのうへと説て心得ぬ積ども有。

と、「水」の字を「氷」と書き間違えて「たるひ」と読むようになったという「たるひ」誤写由来説を提唱した。これに似た言説は、『色葉和難集』（巻四）に祐盛の所説として掲げられている。また『和歌色葉』（巻中）にも見られ、当時には広く流布した説であるらしい。そして彼らの説には「又垂水とも書たる」（『袖中抄』）や「集にたしかに水とある」（『色葉和難集』）というような、「たるみ」の万葉表記は「垂水」であることを強調する発言が目立つ。

俊成はこの二説の存在については当然知っていたはずであろう。しかし、この「たるひ」・「たるみ」の問題に関して、俊成が真正面から取り上げて論じたことはなかった。ただし『古来風躰抄』初撰本における「垂見」という表記、また再撰本における「たるひ」

への変更の背後には、やはり何かの歌学上の主張が込められているような気がしてならない。

#### 四

ここでまず『古来風躰抄』初撰本における万葉抄出歌とその表記について少し考えてみたい。

志貴皇子歌は紛れもなく『万葉集』中の屈指の秀歌であるが、俊成の万葉抄出はただ単に秀歌を選ぶだけというほど単純なものではない。すでに先学によって指摘されているが、俊成は解説部分において『万葉集』の成立や撰者などの諸問題について自説を開陳したが、抄出された歌がその自説を裏付ける具体例や根拠となる一面も持ち合わせている。ことに『六百番歌合』に端を発したいくつかの難義をめぐる論争に関連する歌が煩を厭わず抄出されているのもそのためである。さらに抄出歌の表記にまで、自説を補強・証明するための意図的な配慮や工夫が施されている。例えば、『万葉集』二六六番歌の「し努に」、一五五二番歌の「思努尔」、一九七七番歌の「小竹尔」、二七七九番歌の「之努に」、さらに三四二六番歌の「斯努比」など、「し」の（に）」という表現に拘るこれらの表記が、中世歌壇における最大級の論争を引き起こした難義「かはやしろ」に関する顕昭説を否定し、自説の正しさを裏付ける意図的な操作であることは、すでに渡部泰明氏によって究明されてきた。<sup>16)</sup>そして、

やはり渡部氏の指摘によって明らかになったことであるが、顕昭と激論を交わしたもう一つの難義「かびやがした」に關しても、俊成は自説の信憑性を保証するために、二六四九番歌の「蚊火」、三〇〇番歌の「鹿猪田」などの表記を採った。

万葉の漢字本文を残してそれに傍訓を付す形で表記するような例はほかにも見られる。例えば、六〇八番歌の「餓鬼」という表記は、「垣」に掛けているという俊成独自の説を提唱するためのものである。三五七七番歌の「曾我比」は、『六百番歌合』における顯昭の「そが菊」詠（四四五番歌）に発端する難義論議に關わる三〇三二番歌のコメントと呼応している。三〇一五番歌の「如神」や「漉」は、俊成の「かはやしる」の見立て説を傍証するための表記である。また一三五三番歌と二二一九番歌の「秀」、一〇九六番歌の「あまの香具山」、三〇六二番歌の「忘草」、三九二五番歌の「新年」などの表記からは、類歌の存在に対する注意を喚起しようという俊成の意図が読み取れるのではなからうか。さらに、一四二七番歌の「從明日は」、二〇一四番歌の「白芽子（左側に「アキハキトモ」と傍記）」、三〇八六番歌の「桑子にも」（解説部分で引用する際に「くはこにも」と傍記）など異訓の存する表現が、漢字本文に傍訓を付す形で抄出されたのも単なる偶然とは思えない。

以上見てきたように、『古来風躰抄』の万葉抄出歌に見られる漢字＋傍訓の表記は決して行き当たりばったりの思いつきによるもの

ではなく、自説を立証する有効な手段の一つとして意識的に使われていることが明らかである。逆に言えば、このような表記を取った以上、それなりの理由があるはずだと考えるべきであろう。

それでは、再び一四一八番歌に戻って、俊成が「垂見」という表記を取った理由について考えてみよう。当該歌の「垂見」については、既述のように現存する『万葉集』の諸本には全く異同が見られないが、しかし「たるひ」という訓みは確かに存在し、また『和漢朗詠集』などを通じて広く知られるようになったので、この表記が「たるひ」という異訓と何らかの関わりを持っているのではないかと推測される。実は『和歌童蒙抄』に当該歌の類歌として挙げられた三〇二五番歌も『古来風躰抄』に抄出されていて、ここでは、初撰本・再撰本ともに「たるひのみつの」と仮名だけで表記されているのである。これは俊成がこの「たるみ・たるひ」問題に大きな関心を寄せていることを示しているに違いない。しかし、一四一八番歌は漢字＋傍訓の形で抄出されたのに対して、三〇二五番歌は『万葉集』諸本の間に異同が見られるにもかかわらず、ただ単に「たるひ」という訓みのみの形で抄出された。これはなぜであろうか。

ここで前節で紹介した顯昭・祐盛の説を思い出していただきたい。顯昭・祐盛は、「たるひ」という訓みは「水」を「氷」に誤写したところから生じた誤訓だと主張し、それを裏付けるために、「垂水」こそ正しい表記だと強調した。しかし、顯昭は『六百番陳

状」において「彼集『万葉集』」のことを指す——稿者注）は正字をか、ぬ事もあり。あるひは「所には正字をかけど、又外にはあて字を書事もあればそれは大事ならず」という見方を示し、『万葉集』の表記を統合的に捉えるべきだと考えているので、「又垂水とも書たる」という発言は、『万葉集』に「垂水」と表記した類歌の存在を念頭に置いたもので、必ずしも実際に一四一八番歌を「垂水」と表記した伝本があることを意味するわけではないであらう。もっとも歌語解説書である『袖中抄』という書物の性格を考えればあたりまえのことであるかもしれないが、この発言は一四一八番歌という歌より、むしろ「たるみ」という歌語を問題にしている。『万葉集』における「たるみ」の表記について、一四二番歌や三〇二五番歌をも考慮に入れて統合的に捉えるべきだとする顕昭の見方は近世乃至現代では主流となっている。まして『元暦校本』や『類聚古集』のような「垂水」の本文を持つ伝本が現に存在しているのだから、現在では「たるひ」の異訓について、顕昭・祐盛が提唱する誤写由来説が正鵠を射たものだと考える学者もいる。

『万葉集』の表記に関しては、俊成が顕昭・祐盛と違う立場に立っていることを「かはやしろ」や「かびやがした」などの難義論議からも垣間見ることが出来る。初撰本『古来風林抄』に一四二番歌を抄出せず、三〇二五番歌を「たるひ」の本文で抄出したことは両者の立場の違いを端的に表している。その上、一四一八番歌は

「垂見」という特殊な表記で抄出されている。この特殊な表記を通じて、俊成は「原典の文字に忠実であったこと」を示すと同時に、「原典の文字」は「垂水」ではなく「垂見」であることを強調したかったのであらう。「垂水」を「垂水」と書き間違えることはあり得るが、「垂見」を「垂水」と誤写することは常識的に考えられないから、「垂見」こそ「原典の文字」であることを強調すれば、「垂水」の本文を主張する顕昭・祐盛の発言が事実と相違していることは自ずから浮き彫りになるだけでなく、「垂水」という誤写を前提とする「たるひ」誤写由来説も根底から揺るがされることになるであらう。つまり、「垂見」という表記は顕昭・祐盛が唱える「たるひ」誤写由来説に対する反駁と見なすことができよう。

では、俊成はどうして「たるひ」誤写由来説に反対するのであろうか。この疑問を答えるためには、まず俊成が「たるみ」・「たるひ」の意味をどのように考えているのかを検討する必要があると思

## 五

一四一八番歌及び一四二番歌や三〇二五番歌の「たるみ」については、現在の諸注釈はほぼ一致して瀆を意味する普通名詞と解釈している。顕昭・祐盛が主張する地名説は契沖や賀茂真淵によって近世まで引き継いできたが、最近はあまり顧みられなくなった。た

だ平安時代の和歌における「たるみ」の用例を見てみると、

たるみにて

千代のうちにいくかかへぬるちはやぶるたるみにたてる松はお  
いにけり  
(嘉言集・八五)

という歌がある。「ちはやぶる」という枕詞や前の歌の詞書「須磨の浦にて」から、この「たるみ」は垂水明神のある摂津国の地名として詠まれたものだとは判断できよう。

また、『散木奇歌集』の「悲嘆部」に、

たるみの明神のやしろをみてよめる

たりのぼる人のためとやここにしも跡をたるみのあけの玉がき

(散木奇歌集・八五五)

という歌が見える。詞書を見れば分かるように、「垂水」という地名に寄せて「本地垂迹」を詠んだ一首で、「たるみ」は「垂迹」の「垂」と地名との掛詞である。

しかし、平安和歌における「たるみ」の用例はすべて「たるみ」を垂水明神と結びつけて詠んでいるわけではない。非定家本系の『定頼集』に

たるみする軒にしげれるあやめ草しのぶ心のとけずもあるかな

(私家集大成・定頼集Ⅱ・五一)

という一首がある。初句の「たるみ」については、森本元子氏は軒から滴る水の意と解釈しているが、それだと下句の「とけず」が落

ち着かない。

峠にひや今朝はうららにさしつらむ軒のたるひのしたのたま水

(好忠集・六)

朝日さす軒のたるひはとけながらなかつららのむすほほららむ

(源氏物語・末摘花)

などの歌に見られる「軒のたるひ」という表現との関連を考えると、この「たるみ」は「たるひ」からの溶け水の意で、「とけず」はその縁語になっているのではないか。そしてここではおそろく五月雨の比喩として用いられているのであろう。この定頼歌の「たるみ」の用法がかなり参考になると思われる。

では、俊成は「たるみ」をどのように解釈しているのであろうか。

俊成の歌合判詞や詠作を手掛かりにして探ってみよう。

『古来風躰抄』初撰本の執筆より二十年近く前に行われた『別雷社歌合』に

霞 二十三番 右勝

公衡

朝まだきたるみの涙を見わたせば霞みぞわたる淡路島山(四六)とある歌に対して、判者である俊成は「右歌、この澳の名ぞすこしさらずともやとみえはんべれど、あはぢ島の霞、眺望のこころいとをかしく、霞の歌はかやうにこそみえはんべれば、右の勝にこそ」と、淡路島への眺望は「霞」という題の本意にかなっていることを評価して勝としたが、ただ「たるみ」を「たるみの涙」のごとく用

いることに對して、俊成はやや否定的な評価を下した。つまり俊成は当該歌における「たるみ」の詠み方に難を見出した。俊成にとつて、「たるみ」は歌枕だけでなく、また普通名詞でもあるので、「たるみ」を単なる地名として詠むことは、言葉としての「たるみ」が十分生かされないことになるからであろう。

では、俊成自身はこの「たるみ」をどのように詠んでいるのであろうか。文治六年（一一九〇）に詠まれた『五社百首』に

つらゝゐしたるみの森のさわらびの折りにだにやは人のこざらん

（三〇九）

という歌が見える。住吉社に奉納する百首歌のうち一首で、題は「早蕨」である。この歌の本文については、諸本の間にも多少の異同が見られる。初句を「つゝらゐし」とする本があり、二句の「たるみ」を「たるひ」とする本もある。「つゝらゐし」は誤写だと判断できるが、「たるみ」・「たるひ」の異同に関してはやや厄介である。ただ『五社百首』の顕著な特色の一つとして、松野陽一氏が「俊成によって、社別に性格を考慮した詠み分けがなされている。その表現素材の一部として、歌枕も配慮の一端を担っている」と指摘している。具体的に言えば、『住吉社百首』には「住の江」や「難波」など住吉社ゆかりの摂津国の歌枕が多用されているので、「たるひ」より、やはり同じ摂津国の歌枕である「たるみ」を詠んだ可能性が大きいであろう。当該歌を含む俊成の自筆資料が存在し

ない以上、決定的なことが言えないが、おそらく当該歌の本来の本文は「つらゝゐしたるみの森の」だと判断してよからう。

上述のように、俊成が「たるみの森」を摂津国の歌枕として詠んでいることは、同百首に詠まれたほかの歌枕を見れば明らかである。また、初句「つらゐし」は、同じ『五社百首』に見える

つらゐしかもの河上うちとけて瀬瀬の岩なみ春とつぐなり

（一〇一・賀茂社百首「立春」）

という歌のように、川や水などにかかって、水が張る意を表す歌ことばとして、「東風解氷」のモチーフを表現するために用いられることが多い。「早蕨」歌初句の「つらゐし」もこれと同じ使い方だと思われる。すると、この「たるみ」は「つらゐし」を受け、つららからの溶け水を意味すると同時に、また「森」にかかって歌枕となり、二重の文脈を担う掛詞として機能していると見られる。一首の大意は「凍っていたつららが溶けはじめて水が滴り落ちる垂水の森の早蕨を折る時節でさえも人は訪れてこないのだからか」とでもなるか。先に挙げた公衡詠と比較してみれば、俊成詠は言葉としての「たるみ」が持つ意味とイメージを十分に生かした詠み方をしていることが明らかであろう。

これで分かるように、「たるひ」は今でいうつららを意味する言葉で、「たるみ」はその「たるひ」の溶け水を意味し、「さわらび」の「ひ」と縁語になっている。「たるひ」と「たるみ」両語は意味



領域がつながっていて、重なる部分もありながら、一方は溶け出したつららの「氷」に、一方はその「溶け水」に重きを置いている。つまり、俊成は「たるひ」と「たるみ」を一連の現象の違う側面を言い表す語として捉えているのである。

俊成の「たるみ」についての捉え方はおそらく「たるみ」にかかると「いはそそく」という枕詞と無関係ではないと思う。一四一八番歌の初句は『万葉集』では「石激」と表記し、平安・鎌倉期の『万葉集』伝本はそろって「いはそそく」と訓んだが、現代では多くの注釈書はこの枕詞を「波や流れが岩や石に激しくうちあたってしぶきをあげる」と解釈し、三〇二五番歌に見える「石走」と同じように「いはばしる」と改訓した。しかし、両語の新古今時代前後の作例を見ると、「いはばしる」または「いしばしる」がほとんど「たぎ」にかかると枕詞として用いられているのに対して、「いはそそく」は

いはそそく水よりほかにおとせねば心ひとつを澄ましてぞ聞く  
〔千載集・雑中・一一三四・守覚法親王  
閑居水声といへるころをよみ侍りける〕  
うぐひすはまだ声せねど岩そそくたるみの音に春ぞ聞ゆる

（式子内親王集・二）  
という歌のように、水の音と結びつけて詠まれる例が目立つ。これらの歌に詠まれた「水の音」はざあざあと流れる激流の音だとは考

えにくく、さらさらと流れる浅くて細い流れの音だと考えるべきであらう。これによって、「いはそそく」は新古今時代の歌人たちにとって、せせらぎを連想させる表現だと分かる。すると、一四一八番歌の「たるみ」は岩を撫でるようにさらさらと流れる水の溶け水だと俊成は解釈したのではなからうか。そして、第二節で挙げた「さわらびはいまはおりにも成ぬらんたるひの水いはそそくなり」という『正治初度百首』の俊成歌は、早蕨が萌え出でて今はその新芽を折るころにもなったのであらう、（早蕨の燃え出す「火」によって）溶け出したつららの氷はもうさらさらと音を立てて岩の上を流れているのである、という意味にならう。ここに、音や声に関わる助動詞「なり」が用いられたことから「いはそそく」という表現を聴覚的に捉える俊成の姿勢がはっきりと映し出されている。

「たるみ」をこのように解釈したのは俊成がこの歌を早春の歌と考えたからである。そこに『古今和歌六帖』や『和漢朗詠集』の強い影響が看取できる。この歌は『古今和歌六帖』では「睦月」の題に配列されており、『和漢朗詠集』では「早春」題に収められている。とくに『和漢朗詠集』の場合、「早春」題の下に「氷消田地蘆籬短」や「氷消浪洗旧苔鬚」といった解氷を詠んだ漢詩句が見え、また「谷風にとくる氷のひまごにうちいづる浪や春の初花」（古今集・春上・一二）という和歌が当該歌の次に並び、「立春」題に続いて「東風解氷」をモチーフにした作品が連なっている。『和漢朗

詠集』における歌本文の問題はさておき、題や配列から見ると、編者の藤原公任も「たるみ」を「たるひ」の溶け水と解したのであるろう。もしそうであれば、「たるひ」という異訓は誤写によるものではなく、歌意によるものだと考えられるであろう。

一四一八番歌の「早蕨」について、池田三枝子氏は『爾雅』に見える「薇は垂水」という記述に基づいて、その正体は現在のゼンマイではないかと指摘したが、ワラビにせよゼンマイにせよ、いずれも早春の植物ではないことは確かである。それなのに平安時代の歌人たちはどうしてこの歌を早春の詠と考えたのであろうか。この歌が巻八の巻頭に置かれたのは万葉の編者がこの歌を古歌と考えたからであるが、後の平安時代の人々が配置の理由を誤解して、巻頭に立春前後の迎春の詠を配した勅撰集の配列原則によってこの歌を早春の作とした、という説がある。傾聴すべき説であるが、ただ根本的な理由はやはりこの歌の内容に求めるべきであろう。とくに「もえいづる春ににけるかも」という下句は植物が芽を吹き出す春の到来を詠嘆的に歌い、早春の詠としてふさわしい内容になっていることが認められよう。

このように、一四一八番歌を早春の景色を描いた純粹な自然詠と見る場合、俊成の「住吉社百首」歌と違って、「垂水」という地はとくにこの歌と縁故があるわけでもないのに、垂水の地に遊宴する際の作とか垂水への加封の際の作とかのような特殊な詠歌事情を想

定しない限り、「たるみ」を歌枕と解する必要性が全く感じられない。これは俊成が頭昭・祐盛の地名説に賛成しなかった理由の一つであろう。

また周知のように、この歌は『新古今集』にも入集したが、『和漢朗詠集』と同様、「たるみ」「たるひ」の両方の本文が伝わっている。この歌は春上の三二番に入り、その後次に次のような歌が配された。

鶯の涙のつららうちとけて古果ながらや春を知るらむ

(新古今集・春上・三二)

天の原ふじの煙の春の色の霞になびく曙の空

(新古今集・春上・三三)

「つらら」から「たるみ」へのつながりについて、浅田徹氏は「氷が溶けて春が訪れるという趣向の連続を読みとる」べきだと指摘し、さらに「わらび」の「ひ」と「もえいづる」の「もえ」を三番歌の「煙」の縁語とする新古今撰者の修辭感覚から見ると、この配列は「決して突飛なものではない」と論じた。縁語と掛詞の妙を尽くしたこの配列を見る限り、新古今撰者たちも俊成同様「たるみ」を氷の溶け水と解釈したようである。

ちなみにこの歌は有家、定家、家隆と雅経四人の撰者名注記がついてある。有家を除いて、ほかの三人はともにこの歌を本歌取りした詠作を残した。

岩そそく清水も春のこゑたててうちや出でぬる谷の早蕨

(拾遺愚草・四〇九「早蕨」)

岩そそくたるみの水のうち出でてもなほ下もえの春の早蕨

(明日香井集・八〇四・建保四年院百首・恋)

風寒みたるみの氷とけやらでなほ岩そそく春の白雪

(壬二集・一九五六・住吉三十首・卷)

これらの歌が示しているように、俊成の指導を受けた新風歌人たちはやはりこの志貴皇子歌を早春の歌と捉えたのであろう。特に三首目の家隆歌は「たるみ」と「たるひ」両語に重複部分があることを示すよい例であると言えよう。

これと対照的に、顕昭は「たるみ」「たるひ」を一連の現象の違う側面に着目した語として捉える俊成の考えに賛成しなかったようである。その例として、『古来風躰抄』初撰本が完成した建久八年の翌年あたりに詠まれた『御室五十首』と建仁元年(一一二〇)ごろに詠まれた『千五百番歌合』の顕昭詠を挙げておきたい。

雪ぎえの山のあたりのあまそそきたるひしにけり音も聞こえず

(御室五十首・六三七・冬)

むすぶ手のすずしきのみかいはそそきたるみの音も夏はしられず

(千五百番歌合・一〇一八・夏三・五百十番左持)

顕昭は明らかに「たるみ」と「たるひ」を意識的に区別して、一方を音もしない固体のつららとして、一方をさらさらと音を立てて

流れる液体の岩清水として、それぞれ冬と夏の歌に詠み分けた。

## 六

俊成は再撰本において「たるみ」を「たるひ」に変更した。この変更については武井氏は、前掲の式子内親王詠「うぐひすはまだ声せねど岩そそくたるみの音に春ぞ聞ゆる」と俊成の『正治初度百首』歌とを並べて比べると、両首は「同工異曲」で、「共鳴しあふところ」があると指摘した上で、もし式子詠の原型が「たるひ」であつたら、俊成はこの式子詠に影響されて『正治初度百首』歌を詠み、さらに再撰本において本文変更を行ったのではないかと推測した<sup>32)</sup>。興味深い推測ではあるが、ただこの式子詠の創作時期はおそらくB百首後に付した「建久五年五月二日」という日付より以前であり、俊成と式子との師弟関係を考えると、俊成が『古来風躰抄』初撰本を献上してから初めてこの式子詠を目にしたとは考えにくい。以上見てきたように、俊成は最初から両本文を同義と捉えており、ともに由緒正しい本文と考えたので、この本文変更は「俊成の学説の推移」を意味するものではないであらう。

この本文変更の背後には『正治初度百首』作者の人選問題をめぐって一段と深まった俊成の六条家に対する対抗意識があるのではないかと思う。俊成は『古来風躰抄』再撰本において六条家に対する批判を強めたことが指摘されている<sup>33)</sup>。初撰本の「垂見」という表記

は顕昭・祐盛説に対する反駁であるが、結果として顕昭・祐盛と同じ訓みを取ったから、逆に「たるみ」地名説に肩入れしていると誤解されかねない。そのような誤解を招かないために、もっと明確な形で顕昭・祐盛説を否定する必要がある。そこで歌の解釈に『和漢朗詠集』の影響を受けた俊成は『和漢朗詠集』において優位である「たるひ」の本文をもって顕昭・祐盛説に対抗したのであろう。現に『古来風躰抄』には『万葉集』二四二五番歌の「山」という漢字本文を無視して、「山」のごとく『拾遺集』に従って「さと」と訓んだ例が存在するから、『和漢朗詠集』を尊重する俊成が、その本文に従った可能性が大いに考えられよう。

最後に、「たるみ」「たるひ」の問題をもう一度整理してみたい。一四一八番歌の「垂見」の解釈をめぐって、従来から二説がある。『和歌童蒙抄』などこれを「たるひ」と解釈する動きがある一方、顕昭を代表とする六条家は「垂見」を「垂水」の当て字と見て地名と解し、「たるひ」を誤訓とする。俊成は『和漢朗詠集』によってこの歌を早春の詠と解し、「たるひ」説を支持するとともに、歌の情調や内容から「垂見」を地名と解することに反対した。『古来風躰抄』初撰本において俊成は万葉の漢字本文をもって六条家の説の不確かさを証明しようとした。さらに再撰本において「たるひ」と変更し、六条家の説を批判する姿勢を強めた。では初撰本の傍訓で「タルミ」とあるのはなぜであろうか。実は俊成が「この両語は

ひとつながりの現象の違う側面に着目した語である」と理解していたと考えれば、「たるひ」と「たるみ」のどちらの本文を取っても、志貴皇子歌の解釈にはほとんど変わりがない。唯一の違いは表現の重点を溶け出したつらの「氷」に置くか、「溶け水」に置くかである。

この本文変更は、『古今集』を代表とする中古の歌集を尊重し、心情の表出を重んじる俊成と、あくまで『万葉集』や古語を尊重し、術学的な解釈を好む顕昭との距離、すなわち万葉撰取や古典受容をめぐる両者の立場の違いをくつきりと映し出したと言えよう。

(1) 伝本の分類に関しては、松野陽一氏『藤原俊成の研究』(笠間書院、一九七三) 第一篇「著作研究」第二章「批評活動に関する資料」第一節「歌学書」一「古来風躰抄」に拠る。

(2) 『万葉集』の歌番号は旧国歌大観に拠る。

(3) 冷泉家時雨亭叢書所収『古来風躰抄』(朝日新聞社、一九九二) に拠る。

(4) 『日本歌学大系』に拠るが、同じ再撰本系統の高松宮本、静嘉堂本、竜門文庫本も「たるひ」となっている。

(5) 『仙覚全集』(古今書院、一九二〇) に拠る。

(6) 武井和人氏「たるみ」と「たるひ」――『式子内親王集』校讎余考――。

『中世和歌の文献学的研究』（笠間書院、一九八九）所収。

- (7) 平安鎌倉期の『和漢朗詠集』古写本の中、御物卷子六紙本、御物伝公任筆卷子本、関戸本などは「たるみ」とあり、伝定頼筆山城切、御物伝行成筆粘葉本、伊予切、伝伊行草手下絵本などは「たるひ」とある。伝本の数からいえば「たるひ」の本文の方が優勢かと思われる。詳しくは前掲武井氏論文を参照。

- (8) 宮内庁書陵部蔵写本二冊（五〇一・九〇九、即ち『新編国歌大観』の底本）国文学資料館マイクロフィルムに拠る。なお、和歌の引用については、とくに断りを付した場合をのぞき、本文および歌番号は『新編国歌大観』に拠る。以下は同じ。

- (9) 今回調査し得た伝本は、以上の書陵部蔵本のほか、また彰考館文庫蔵写本二冊（巳／拾四）、国立公文書館内閣文庫蔵写本二冊二種類（二〇一・二五八と二〇一・二六二）、板本百首部類本と統群書類従本がある。統群書類従本以外、すべて国文学資料館マイクロフィルムに拠る。なお、注（6）の武井氏論文に、山崎桂子氏による調査でも異同が報告されていない旨の注がある。

- (10) ちなみにこの歌は『雲葉集』（春上・五三）と『統古今集』（春上・三六）にも入集したが、ともに「たるみ」「たるひ」両方の本文が伝わっている。

- (11) 引用は『日本歌学大系』に拠るが、ただ表記、清濁は私意により改めた。

(12) 『古葉略類聚鈔』は「垂水之水」に作る。

- (13) 当該歌前後の作に「猪名野」「武庫川」「難波」堀江」「住吉」などの地名が見えることも地名説の一因と考えられる。なお『類聚古集』の当該歌の下に小字で「撰津作」と記す。

(14) 例えば、新日本古典文学大系『万葉集』脚注。

- (15) 『袖中抄』諸本のうち、高松宮本や冷泉家時雨亭文庫本などの古写本はともに卷三が欠けているので、卷三に限って言えば、特に善本と思われる伝本がないため、引用は本文の乱れが少ない『日本歌学大系』本に拠る。

- (16) 具庭鑑氏「古来風躰抄における俊成の万葉歌撰歌意識」（『国語国文研究』九三、一九九三・二）また渡部泰明氏「古来風躰抄における万葉集メタテキストとしての抄出」（『院政期文化論集二 言説とテキスト学』（森話社、二〇〇二）所収。

- (17) 以下の諸例の引用はすべて注（4）掲の『古来風躰抄』俊成自筆本に拠る。

(18) 渡部泰明氏「藤原俊成の〈縁語的思考〉——「しのに」をめぐって——」（『国語と国文学』二〇〇四・五）

(19) 注（16）掲渡部氏論文。

(20) 引用は新日本古典文学大系『六百番歌合』に拠る。

- (21) 例えば、澤瀉久孝氏『万葉集注釈』は『綺語抄』には（中略）既に「そ、く」の意が「激」の意でなく、今日普通に用ゐる「瀧く」意に

なつてをり、「垂見」が「垂水」と書換へられ、それが更に「垂氷」と誤つてしまつたのである」と、おおかた頭昭・祐盛の説に沿つて解釈している。また前掲島津忠夫氏校注『古来風脉抄』の頭注は澤湯氏の説に従う。

(22) 島津忠夫氏校注『古来風脉抄』(日本思想大系『古代中世芸術論』所収) 一四一八番歌の頭注。

(23) 森元子氏『定類集全釈』(風間書房・一九八九)。

(24) 今回調査しえたのは以下の伝本である。

(一) 非部類本(分類は松野陽一前掲書に拠る)

A 大神宮・賀茂・春日・住吉・日吉の順の伝本

静嘉堂蔵五冊本(二〇五・一四)

宮内庁書陵部蔵一冊本(五〇一・七六三)

宮内庁書陵部蔵一冊本(五〇一・七六四)

B 大神宮・賀茂・春日・日吉・住吉の順の伝本

板本百首部類本

(二) 部類本

A 大神宮・賀茂・春日・住吉・日吉の順の伝本

国立公文書館内閣文庫蔵一冊本(二〇一・三七二)

B 大神宮・賀茂・春日・日吉・住吉の順の伝本

宮内庁書陵部蔵一冊本(五〇一・七六二)

宮内庁書陵部蔵一冊本(伏・一一五) 春部のみの残本。略称「書陵

部残本」

大阪市立大学森文庫蔵一冊本(国文学資料館紙焼写真番号C四一四

八) 略称「森甲本」

大阪市立大学森文庫蔵一冊本(国文学資料館紙焼写真番号C四一七

二) 略称「森乙本」

群書類従本

なお、冷泉家時雨亭藏本などいわゆる「長秋草」系統の伝本は、「不遇恋」以下の残欠本であるので、当該歌を含まない。

(25) 書陵部残本と静嘉堂本は初句「つゝらゐし」に作る。森甲本と類従本

は「たるひ」に作る。森乙本と静嘉堂本は「たるみ」の「み」の右に

「ひ」と注記す。なお、「住吉切」と呼ばれる俊成自筆の同百首断簡が

伝わっているが、残念ながら当該歌を含む断簡の伝存がまだ報告され

ていない。

(26) 注(一) 掲松野陽一氏著書二二七ページ。

(27) 『類聚古集』では「石灘」と表記するが、後世のさかしらによる改竄

であるという見方が一般的である。ちなみに『類聚名義抄』では「灘

に「ソ、ク」という訓が見える。

(28) 『時代別国語大辞典上代編』(三省堂、一九六七)

(29) 池田三枝子氏「垂水の上のさわりび」(上・下)『銀杏鳥歌』第4・5

号

(30) 新日本古典文学大系『万葉集』当該歌脚注。

- (31) 浅田徹氏「垂見の上の早蕨・あかねさす紫野」和歌文学大系月報第1号(明治書院、一九九七)
- (32) 注(6) 掲武井和人氏論文。
- (33) 注(1) 掲松野陽一氏著書三六七ページ。